

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13284

研究課題名（和文）水俣病関係写真の歴史性に関する人類学的アーカイブズ研究

研究課題名（英文）Anthropological Archival Research on the Historical Significance of Minamata Disease-related Photographs

研究代表者

香室 結美（Kamuro, Yumi）

熊本大学・文書館・特任助教

研究者番号：40806410

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はほぼ計画通りに進展した。成果は以下の3つである。（1）研究課題である水俣病関係写真の意義と作用の歴史化について、写真家・桑原史成と塩田武史が撮影した1960～70年代の写真に関する査読論文発表と論集への寄稿、日本文化人類学会等での口頭発表を行い、オンラインイベントを開催した。（2）塩田武史の遺族との協働作業により、塩田ネガフィルム約千本のデータベースを構築し、熊本大学文書館で公開するための準備を整えた。（3）水俣病関係写真を撮影してきた写真家とその遺族たちが発足した一般社団法人「水俣・写真家の眼」の定例会に参加し、写真家と遺族とのネットワークに参画すると共に活動実践を支援した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的および社会的意義は以下の2つである。（1）文化人類学とアーカイブズ学を横断した観点から水俣病関係写真の保存と公開に関する具体的事例の記述を行い、両学問分野に寄与しうる先駆的な研究例を提供した。（2）一般社団法人「水俣・写真家の眼」が目指す水俣病関係写真の保存と未来へ向けた公開の試みに共鳴し、文化人類学およびアーカイブズ学的見地からのノウハウ提供や支援、一般公開のオンラインイベントを行った。写真フィルムの保存とデジタル化、データベース構築に関わる協働作業は、「水俣病」そして不知火海沿岸地域の映像と記憶を広く社会に還元することに直結し、社会的意義が極めて高い。

研究成果の概要（英文）：The achievements of this project are as follows. First, regarding the historicalization of the significance and interaction of Minamata disease-related photographs, I published a peer-reviewed paper on photographs taken by photographers Shisei Kuwabara and Takeshi Shiota in the 1960s and 1970s and contributed to a collection of articles. In addition, I gave oral presentations at the Japanese Society of Cultural Anthropology, and organized an online event. Second, in collaboration with the bereaved family of Takeshi Shiota, a database of about 1,000 Shiota negative films was constructed and prepared for public access at the Kumamoto University Archives. Third, I participated in regular meetings of the "Minamata Photographer's Eye," a general incorporated association established in 2022 by photographers who have taken Minamata disease-related photographs and their bereaved families, and took part in networking and practical activities between them.

研究分野：文化人類学

キーワード：アーカイブズ 写真 歴史性 メチル水銀中毒事件 水俣

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景は、以下の3点である。

(1) 1956年に公式確認された「水俣病」(メチル水銀中毒)については医学、法学、文学、社会学、人類学といった様々なアプローチから研究が進められてきたものの、「水俣病」の発生に由来する膨大な写真についての人文社会科学的評価・分析と今後の保存・活用および継承に関する専門的研究は未着手のままであった。しかしながら、写真は「水俣病」や患者や支援者のイメージ形成、社会情勢、加害と被害の関係、事件に関わってきた支援者、研究者、写真家たちの想いや患者家族との距離感や関係性といった様々な要素がぶつかり合う問題含みの場でもあり、その動態を記述し分析する必要があると考えた。

(2) 「水俣病」の被害を受けてきた人びとや、「水俣病事件」に支援者や研究者として直接的に関わってきた人びとが高齢化し、「水俣病」に関する写真が喚起する記憶や微細な情報が日々失われる状況にあった(この状況は本研究を実施してきたこの3年間でさらに深刻なものとなっている)。研究代表者は、写真を撮影したプロ・アマチュア写真家やその遺族、および写真に写っている方々への聞き取り調査、映像資料の収集・保存の取り組みを早急に行うべきことを痛感し、本研究への取り組みを開始した。

(3) 「水俣病」の解明に関わってきた地元熊本の国立大学文書館で働く研究者として、同館の制度的性質を批判的に捉え、本館が誰のためのいかなるアーカイブズになり得るかを問い実践する必要があると考えた。事件当事者の高齢化が進む中、次世代の私たちはどのようにして資料や事件当事者の記憶や経験といった「メタデータ」を収集し、受入れ、理解し、誰と共にどのようなアーカイブズを構築していくべきなのか。資料を後世へ遺すというアーカイブズの存在は、具体的な「未来」とその担い手の顔の想定なしには成り立たないため、今後いかなる人々と協働しながら、どのような「未来」のためにアーカイブできるのか、その考察と記述に取り組む必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「水俣病」の発生に由来する写真(以下、水俣病関係写真と呼ぶ)の歴史性を明らかにし、写真アーカイブズの未来への継承可能性を検討することである。本研究では、アーカイブズ施設の調査、プロ・アマチュア写真家やその遺族への聞き取り調査、映像資料の収集・保存の取り組みから、過去～現在:「水俣病」事件史の各時代における関係写真の意義や読まれ方とその変遷を記述し事件史に位置づける(=本研究でいう歴史化)、現在～未来:写真アーカイブズの構築・公開・継承の実践と記録を行う。「水俣病」の発生から現在まで写真がどのように生成され読まれ続けてきたのかその動態を描き出し、誰にとってのどのような写真アーカイブズを今後誰と共にどのように遺すことができるのか、その実践可能性を検討する。

3. 研究の方法

本研究では、理論的アプローチと実践的アプローチの両面から課題に取り組んだ。

(1) 理論的アプローチ=水俣病関係写真の歴史性の解明:人類学や社会学における1960年代以降の写真研究、そして1990年代以降の写真アーカイブズに関する研究を参照し、水俣病関係写真を静的な「モノ」として捉えるのではなく、時代や被写体の意識の変化によって写真の意味が再編成される変遷過程に着目し記述した。患者家族といった撮られてきた者たちと撮る者との距離感や関係性を中心に、文献、写真集、ミニコミ誌等の分析と、写真家やその遺族および写真に写っている人びとと関係者への聞き取り調査を行った。人類学、写真、アーカイブズ分野で議論されてきた理論的問いを、水俣病関係写真の歴史性という固有の事例を具体的に描き出すことで問い返し、理論と実践の発展に寄与することを目指した。

(2) 実践的アプローチ=熊本文書館における写真アーカイブズ継承の実践:散逸傾向にある水俣病関係写真を熊本文書館で受入れ、保存し今後の研究利用に供する手がかりとして、写真家・塩田武史の遺族が個人管理中の写真ネガのデジタル化および将来的な保存方法の検討を行った。資料提供者との対話による関係構築と資料理解、およびその後の研究への展開は研究代表者が行ってきた人類学のフィールドワークと類似している。研究代表者は塩田の遺族とカウンターパートとしての関係性を築き、塩田と現地の人々との関係性がどのようなもので、どのように写真を撮ってきたのかといった点の聞き取り調査を行いながら、遺族が今後どのように塩田の写真を保存し、公開していきたいのか、共に検討し実践した。水俣を撮影してきた他の写真家たちとも連絡を取り、水俣病関係写真の総合的な保存をどこで誰がどのように、そして誰のために行うことが可能であるのかという議論に参加し、本館における実践への反映を試みた。

4. 研究成果

(1) 研究課題である水俣病関係写真の意義と作用の歴史化に関して、写真家・桑原史成と塩田武史が撮影した1960～70年代の写真に焦点を当てた研究成果を発表した。韓国語論集『東亜細亜研究叢書 第9巻』への寄稿として「撮る」「撮られる」の歴史的狭間から桑原史成が撮っ

た 1960 年代の水俣病闘争から今日の共同性まで」査読付き論文として「水俣病関係写真のアーカイブ化と歴史的プロセス 写真家・塩田武史のネガフィルム・データベース構築の事例から」を発表した。塩田武史のネガフィルム・データベース構築については、日本文化人類学会等での口頭発表「今日の資料サルベージ試行 水俣病関係写真ネガフィルム・データベース化の事例から」でも成果の一部を示した。海外では文化人類学者が現地のアーカイブズ実践に関わり、論文を発表しているが、日本における同様の事例は極めて少ない。文化人類学とアーカイブズ学を横断した観点から水俣病関係写真の保存と公開に関する具体的事例の記述を行った本研究は、両学問分野に寄与する先駆的な研究例となり得る。また、「水俣病」というセンシティブかつ未解決の問題に学術的に取り組む研究事例として、国内外の公害問題や社会問題とアーカイブズに関する課題に解決のアイデアを提供することができる。

(2) 塩田武史の遺族との協働作業により、塩田のネガフィルム約千本のデータベースを構築し、熊本大学文書館で公開するための準備を整えた。また、熊本大学文書館で写真フィルムや紙焼き写真といった媒体を受入れるための保存環境を整え、専門家から取り扱いのノウハウを学んだ。このような取り組みは、写真家の遺族からの写真提供に関する国内外における重要な参考事例となり得るため、今後英語論文やウェブサイト上での英文発信につなげていきたい。データベース構築の具体的作業としては、フィルムに関するメタデータの作成(撮影者、場所、年月日、人物名など)簡易コンタクトシート画像の作成、データベースのデザイン構築、公開基準の検討、画像公開における権利許諾に関する検討を行った。なお、今後映像作品化することを視野に入れ、データベース構築の過程を映像と音声でも記録した。

(3) 一般公開のオンラインイベントとして「水俣・写真トーク」を開催した。塩田武史の遺族が話し手となり、塩田撮影の未公開写真やネガフィルムに写されているものについて語った。水俣で暮らす若者たちや、水俣地域の語りや記憶を次世代に伝えようと活動する人びと、研究者が参加し、水俣に関して相互に語り合う機会を提供することができた。

(4) 「水俣病」に関する写真を撮影してきた写真家とその遺族たちが発足した一般社団法人「水俣・写真家の眼」の月例会に参加し、各写真家の考えや議論を拝聴し、アーカイブズ施設側からの意見を伝えるなかで、写真家の間でフィルムを遺すことやその方法についての意見が多岐に分かれることがわかった。どのような媒体で、どのような形で遺すのか、あるいは遺さないのか、どこまで公開可能なのか、誰にフィルムを任せたいのか、フィルムはどこにあるべきなのか、権利についてどう考えるのかといった、細かな論点が浮上してきた。このような経験から見えてきたのは、アーカイブズ化を進めていく各段階における人びとの思考や行動原理、関連する活動や実践、議論や合意形成過程自体を記録することの重要性である。ひとつのアーカイブズが形をなすまでの過程、すなわち、その写真群や資料体がなんらかのまとまりとして同じ場所に置かれるまでの経緯や、旧蔵者たちの思考や経験、そして各資料の性質を丹念に記録し描き出すことは、資料に付随する微細な物語や記憶を継承することにつながる。その過程の記録には、文化人類学における民族誌的記述の方法が貢献すると考えられ、写真や資料自体の継承と共に重要である。アーカイブズ実践には、資料に携わってきた当事者や旧蔵者との関係性の構築と意識のすり合わせが不可欠であり、それは自ずと長期的な協働作業になる。水俣病関係写真をめぐる問題は、1950~60年代以降に撮影された瞬間から時間が経った現在においてむしろ表出しているのであり、散逸傾向にある関係写真をひきつづき保存しながら、写真から喚起される物語を描き出し、「水俣病」と写真をめぐる人間の生き様を記録し記述する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 香室結美	4. 巻 4
2. 論文標題 水俣病関係写真のアーカイブ化と歴史的プロセス 写真家・塩田武史のネガフィルム・データベース構築の事例から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文科学論叢（熊本大学大学院人文社会科学研究所(文学系)）	6. 最初と最後の頁 59-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 香室結美	4. 巻 -
2. 論文標題 「撮る」「撮られる」の歴史的狭間から 桑原史成が撮った水俣病闘争から今日の共同性まで	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東義大学校東アジア研究所第28回学術セミナー（要旨集）	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 香室結美	4. 巻 -
2. 論文標題 今日の資料サルベージ試行 水俣病関係資料ネガフィルム・データベース化の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本文化人類学会研究大会発表要旨集	6. 最初と最後の頁 D14-D14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jasca.2022.0_d14	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 香室結美	4. 巻 -
2. 論文標題 コロナ禍の時代における公害資料の有する意義について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 公害資料館ネットワークだより2020年度	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 香室結美
2. 発表標題 水俣病関係写真のアーカイブ化と歴史的プロセス 写真家・塩田武史のネガフィルム・データベース構築の事例から
3. 学会等名 第46回韓国日本近代学会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 香室結美
2. 発表標題 「撮る」「撮られる」の歴史的狭間から 桑原史成が撮った水俣病闘争から今日の共同性まで
3. 学会等名 東義大学校東アジア研究所 第28回学術セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 香室結美
2. 発表標題 今日の資料サルベージ試行 水俣病関係写真ネガフィルム・データベース化の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 香室結美
2. 発表標題 熊本大学文書館における水俣病関係資料のアーカイピングと課題
3. 学会等名 公害資料館ネットワーク 資料研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 香室結美
2. 発表標題 人類学的アーカイヴィングの試み 水俣病関係資料の寄贈受入と公開の事例から
3. 学会等名 生きる文化遺産研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 権五定・李修京・林相珉・鈴木啓孝・慶田勝彦・下田健太郎・香室結美共著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 博文社（ソウル）	5. 総ページ数 401
3. 書名 東亜細亜研究叢書第9巻（「撮る」「撮られる」の歴史的狭間から—桑原史成が撮った1960年代の水俣病闘争から今日の共同性まで」pp. 321-352 を担当、韓国語）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>熊本大学文書館 http://archives.kumamoto-u.ac.jp/ 熊本大学文書館2021年度報告 NEWSLETTER 第2号 http://archives.kumamoto-u.ac.jp/inventory/newsletter/2021newsletter2_KUarchives.pdf 熊本大学文書館2020年度報告 NEWSLETTER 創刊号 http://archives.kumamoto-u.ac.jp/inventory/newsletter/2020newsletter_KUarchives.pdf</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------